

追え!!

2-4 大野 由梨香



どっちもモミジに
関係している。

黄葉の過ぎにし子等と携はり
遊びし磯を見れば悲しむ

↓(古井方葉の)七くたつた妻と手を携えて
遊んだ磯を見ると悲しい。

真草刈る荒野にはあれど黄葉の
過ぎにし君が形見とそ来し

↓草壁皇子作。(真草刈る)荒野ではあるが、
(黄葉)今付七き皇子の、形見の地として来た。

泪の和歌

モミジは死の
枕詞だったのか?

調べてみると、「モミジは死の枕詞」といふことがわかった。モミジという言葉は「操み出(い)るがく、こころまろ)からきている。葉が赤や黄色に色づき、その後落葉樹の葉が落ちることから、モミジが死、散りゆく人間の命ではない命と結びついたのでと思う。

モミジはどんな存在だった?

モミジの美しいのは夏のほととぎすに並んで雪回花に加えられるべきものとして、貴族の生活に浸透していった。屏風絵や衣箱、そのほかさまざまな工芸品に用いられている一方、死の枕詞にも使われていたことから、死といふ世の無常を美しいものに例える表現する古人の風流心がうかがわれる気がしないだろうか。

紅葉ではなく黄葉?

現代語の赤、赤色」といふ言葉の枕詞として、「モミジは」が当てられているが、漢字は紅葉、黄葉の両方が用いられる。また、古語辞典のモミジは「紅葉」黄葉の表記がある。しかし、黄葉が使われるのは葉が色付くという高味のみで、古人は赤や黄に染まる葉を「し」紅葉や「黄葉」とよんだのであろう。

和歌が詠まれた場所や
時期を予想できるか?

なんと万葉には百首以上あるモミジを詠んだ和歌のうち八八例が「黄葉」である。古人は赤や黄のモミジを好んだようだ。そこで「黄葉が何を指して詠まれたのか、三十首の和歌に付と調査したところ、山全体を指している場合が二十首、穀が二首、草が一首、野が一首、梨が一首、その他五首と、特定の植物を詠ずる山草、もとははナシのまじりに風流でないものを取上げている和歌がほとんどであるといふことがわかった。つまり、黄葉だけでは、和歌の情報を手に入れることは難しい。全体としての葉の色づきを、物々の古人が和歌に詠んだのだ。

ホトトギスと一息植物学

今ではモミジとカエデは全く同じ植物の名である。しかしモミジは本来、カエデ同様植物名なのだ。カエデ科、バラ科、ウルシ科、トドナ科、ニシキギ科、ミツギ科、ツツジ科、カキ科などの中に、紅葉する落葉樹(紅葉樹)として知られているものがあつた。特にカエデの紅葉が美しいことから、うっかりカエデがモミジの名を専有することになった。ちなみに、モミジは「紅網」から起ったとする説もある。

参考文献

- ・万葉集
- ・四季のこぼれ話
- ・日本の樹木
- ・新日本魚文学(新編)
- ・采川(著)
- ・萬葉植物
- ・山あき書店
- ・四季の言葉
- ・原色図譜
- ・季寄せ(草木花)
- ・中村裕著
- ・朝日新聞社
- ・現代語から古語
- ・まじりこぼれ

編集後記

モミジが古人にとりてこれほど風流な古のものととらえられていたとは知らなかった。また、古人も現代人と同じように、それぞれの植物ではなく全体としてのモミジの美しい色合いを愛んでいたのだとわかり、モミジがまたたいた。秋が待たせたい。

